

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-142	24-040	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Expanding our understanding of long-term trends in alcohol abstention and consumption in England (2001-19) using two age-period-cohort approaches イングランドにおける禁酒と飲酒の長期的傾向 (2001-19 年) についての 2 つの APC 分析による検討		
執筆者		
Opazo Breton M, Henney M, Kersbergen I, Brennan A, Holmes J.		
掲載誌		
Addiction. 2024 Oct;119(10):1726-1736. doi: 10.1111/add.16599.		
キーワード		PMID
禁酒、イングランド、 age-period-cohort、アルコール、消費傾向		39036923
要 旨		
<p>背景: イングランドにおけるアルコール消費量はここ数十年で減少しているが、アルコールに関連した死亡率はそのままの状況を維持している。Age-Period-Cohort(APC)モデルは、この傾向を理解するのに有用である可能性がある。本研究では、APC モデルを用いて、2001 年から 2019 年までの禁酒と飲酒の長期的傾向を検討することを目的とした。</p> <p>方法: イングランドにおける反復横断調査データ (2001~19 年) を用い APC モデルで検討した。対象者は 13 歳以上のイングランド在住者で、Health Survey for England の参加者である。アウトカム変数は禁酒と消費量 (単位) であった。9 つの年齢グループ (13~15 歳、16~17 歳、18~24 歳、25~34 歳、65~74 歳までと 75 歳以上、基準 45-54 歳)、4 つの期間 (2001-04、2005-09、2010-14~2015-19、基準 2005-09)、18 個の 5 年出生コホート (1915-19~2000-04、基準 1960-64) を設定した。年齢効果として、収縮期血圧と拡張期血圧、期間効果として、アルコールの入手可能性、インターネット利用、家計のアルコール支出、出生コホート効果として、喫煙の有病率、過体重の有病率を代理変数した。</p> <p>結果: 禁酒のオッズは 13~15 歳の若い年齢で大きく [オッズ比 (OR) =5.38 ; 95%信頼区間 (CI) = 4.50-6.43]、最初の期間である 2001-04 年 (OR = 0.83 ; 95%CI=0.79-0.86) で最も低く、出生コホートによって U 字型のパターンを示した。単位あたりのアルコール消費については、発生率比 (IRR) は 18-24 歳まで増加し (IRR=1.41、95%CI=1.34-1.48)、その後は減少し、最初の期間である 2001-04 年に最も高く (IRR=1.07、95%CI=1.05-1.08)、出生コホートは逆 J 字型を示した。代理変数を用いたアプローチでは、血圧測定、アルコールの入手可能性、過体重の有病率を使用した結果、元モデルとは異なる APC 効果が得られた。しかし、インターネットの利用、アルコールに対する家計支出、喫煙の有病率は、元モデルと同様の APC 効果がみられた。</p> <p>結論: 2001 年から 2019 年にかけて観察されたアルコール消費量の減少とアルコール関連死亡増加の間にみられる矛盾は、2010 年以降の禁酒傾向の停滞と 2001 年以降の消費減少の鈍化で、部分的には説明できるかもしれない。</p>		